

第2回 都立高校の魅力向上等に係る懇談会 議事要旨

日 時：令和7年11月20日（木曜日） 15時00分から17時30分まで

会 場：都庁第一本庁舎42階 特別会議室A

出席委員：11名（欠席2名）

【非公開形式に関する注記】

本懇談会は、委員間の自由闊達な意見交換を確保するため、前回に引き続き非公開形式で実施した。議事要旨については、委員からの主な意見・指摘を中心に整理し、公表する。

1 開会

○事務局より開会の挨拶および会議運営方法等の説明

○前回欠席委員について紹介

2 議事

○ 座長による講話

座長より、「『縮小期』の社会を編み直す－アンラーニングと横糸の意味－」と題し、現代社会の変化と教育の位置づけについて問題提起があった。

主な内容は以下のとおり。

- ・東京都は他の広域自治体に比べれば減少率は小さいものの、中・長期的には人口減少期が続くと予想され、国全体としても人口減少社会とどう向き合うかが問われる。
- ・その際、（直線的な社会変化を想定して）国家が定める目的に従って望ましい人間を育成するという物語（目的論的な進歩史観）自体を問い直さなければならない。経済はすでに定常経済の状況にあり、政治的次元においては、公共圏、つまり、異なる意見や小さくされた声に耳を傾け合い、対話を重ね相互に変容しながら一緒に場をつくっていくという関係性そのものがこれまで以上に大切にされなければならない。「縮小期」に芽生えているこうした変化を丁寧に読み取る必要がある。
- ・社会が求める能力や一元的アイデンティティに合わせるのではなく、さまざまな特徴をもった諸個人が得意と苦手をもちよって社会を形成していく時代に入る。そこで必要になるのは、「弱さ」「できなさ」を認め合い、対話と学び合いを大切にする関係性である。テクノロジーも、効率や利益偏重（収奪的傾向）に陥るのではなく、多様な人々の生を支える包摂的な性格にシフトせざるを得ない。
- ・「縮小期」の社会像は、多様性を認め、個々の違いを尊重するイタリアのことわざ「近づいてみると誰一人まともな人はいない」や「わからないから学び合い、できないから支え合う」（インクルーシブな社会）、あるいは、「『力→活動→意味』から『意味→活動→力』への転換」（浜田寿美男氏）という言葉でイメージすることができる。
- ・〈知〉の三層構造を「人間知（土台）・科学知（中間）・情報（表層）」として捉えるとすれば、

デジタル社会の負の側面は人間知を忘れがちになる点にある。効率や利益偏重のテクノロジーに流されず人間固有の社会を創っていくには、三層構造を往還する経験が欠かせない。

- ・「拡大期」を前提とした効率や利益偏重のシステムに絡めとられず、公教育の屋台骨を担う公立高校はこの往還する学びを大切にし、単なる交換価値としての人材にとどまる 것을避けなければならぬ。外側から与えられる社会的カテゴリーを一方的に押しつけて子ども・若者の時間を奪ってはならない。
- ・したがって大切なのは、（人間ならではの）対話とエンパシーであり、そのための経験の幅と学びの深さを保障することである。行政としては、どのように「横糸」を構想していくかが問われる。
- ・都立高校がこれまでにぐんできた「財産」を大切にすることはいうまでもないが、「縮小期」の社会にふさわしい学びのヒントは（逆説的にも）他地域の意識的で持続可能な試みに見いだせる。
- ・「地域の高校」を存続するために基礎自治体と地域とともに協働的に場を創ってきた高校。人権学習の実践をベースに、教職員がまわりの人々といっしょに学び合いながらインクルーシブな学校づくりへと発展させてきた高校。地域の中小企業などの関係者が柔軟な職業体験教育システム（デュアルシステム）を育て、地域協働本部の試みへとつなげてきた高校。学業も部活も行事も自治活動も…と、経験の幅を大切にする公立校らしい進学校等々の先導的事例がある。
- ・完全無償化の流れや人口減少によって公立高校が窮地に立たされているが、以上の視点に立って、各検討テーマにとって横糸となる根源的な問いを立て議論していくことが鍵となる。例：「グローバル化とは？デジタル化とは？」を北欧等の教育の現状に学ぶ、生徒の生の現実と彼らの視点から「多様な生徒」が意味するところを掘り下げ单一自治体を超えた協働の可能性を考える、生徒や保護者が立派なニーズを持っていると考えるだけではなく従来の「あたりまえ」を問い合わせ直す視点（アンラーニングの視点）を大切にする…等々。
- ・従来の「生徒ニーズ」の固定観念を見直し、生徒のほんとうの声を（人間知の位相で）聴き取り、学校現場にとって行政が「お手本」となる議論とふるまいを示せるように努めたい。

- ・座長が示した「横糸」の視点について、知識や制度を積み上げる学びだけでなく、人や分野が交差することで学びが立体的・創造的になる点に共感が示された。
- ・生徒が「わからない」「できない」と感じる過程を成長の起点として肯定的に捉える考え方には、正解を急がず、試行錯誤や創造を重ねる学びの重要性を再認識させるものとして受け止められた。
- ・学びを成果や評価に直結させる前に、「面白い」「やってみたい」と感じる原体験をいかに保障できるかが、高校教育の在り方を考える上で重要な論点であるとの認識が共有された。

講話を受け、本日の議論では、各取組の制度設計や機能面だけでなく、「生徒がどう感じ、どう学び、その経験がどう未来につながっていくのか」という観点を共有しながら進める旨が確認された。

○ 都教委施策及び参考事例説明

事務局より、「グローバル化やデジタル化等に対応できる人材づくり」に係る取組の方向性や参考事

例の紹介が行われた。

○ 意見交換

委員からは、幅広い視点で意見が交わされた。主な意見は以下のとおり。

(1) グローバル人材育成に関する意見

- ・国際的な視野を育成する教育の充実は重要であり、海外大学との交流機会や留学支援をさらに推進していく視点が必要。
- ・IB教育については、日本語 DP やデュアル DP の設置など、より多様な生徒が挑戦できる仕組みが望まれる。
- ・英語は目的ではなく「コミュニケーションの道具」として自然に活用できる学習環境が求められる。
- ・国際金融教育についても、産業界が求める「課題発見力」「粘り強い挑戦マインド」「社会への貢献意識」など、人間力と専門性を併せ持つ資質育成が重要であるとの意見があり、これらの視点も今後の教育課程設計で考慮する必要がある。
- ・高校段階で、金融や国際経済の視点を学ぶ機会の拡充が魅力向上にもつながるとの意見があった。

(2) デジタル分野・専門教育に関する意見

- ・工科高校は社会ニーズが高く、魅力の発信・ブランディングを強化すべきとの意見。
- ・デジタル分野は生徒の関心が高く、デジタル分野に特化したスペシャリスト育成型高校の設置提案があった。
- ・学ぶ側のモチベーションとして、「学ぶワクワク感」が本質的に重要との指摘。
- ・異分野とつながる STEAM 型学習や、文系・理系の枠を超えた人材育成の必要性が示された。
- ・生徒の興味や力には差があることを踏まえ、意欲や適性のある生徒が早期に専門的な学びへ挑戦できる環境整備が、進路選択の幅を広げるとの意見があった。

(3) 高校教育全体の方向性に関する意見

- ・探究活動と地域連携・企業連携を通じ、生徒自身が社会課題に触れながら進路選択につなげる学習機会が有効。
- ・保護者への情報提供や広報方法を整理し、学びの価値を社会へ伝えていく仕組みづくりが求められる。
- ・人材育成のみを強調し過ぎると、生徒の負担や学びの息苦しさにつながる懸念があり、公教育として生徒一人一人に寄り添う視点が必要との意見があった。
- ・目的意識が明確でない生徒に対しても、学びの意味を支えることが公教育の重要な役割であるとの意見があった。
- ・専門学科高校で学んだ人材はポテンシャルが高く、企業の採用ニーズは強いものの定着が課題。学校と企業の一層の連携強化がミスマッチ解消に必要。

○ 今後の進め方について

本会議の議論を踏まえ、テーマ別の専門部会を設置し、学校現場の声を反映しながら具体化を進める方向性が確認された。

3 事務連絡

○事務局より

本日の議論を踏まえ、今後の検討の方向性について事務局より以下のとおり整理を行った。

- ・本懇談会では、多様な視点から幅広い提案が示され、今後の検討に向けた論点が明確化。
 - ・工科高校、デジタル分野、国際金融分野、日本語を含むデュアル IB 教育など、複数の取組が今後の方向性として考え得るものとして整理。
 - ・農・工・商といった既存の枠にとらわれない柔軟な専門教育の必要性。
 - ・寄せられた意見については、制度設計、教育内容、広報の在り方等の観点から事務局でさらに精査し、具体化に向けた検討を進める予定。
 - ・設置予定の専門部会において、学校現場の状況や生徒の学びへの影響を踏まえながら、実効性のある施策案を検討。
 - ・懇談会の運営については、委員の自由かつ率直な議論を確保する観点から、次回以降も非公開形式を継続する方向性。
- 次回開催日程について
- ・第3回は令和8年3月上旬頃に開催予定。

4 閉会